

【熊谷聖パウロ教会建立 100 周年記念事業記念講演会 2019 年 5 月 25 日開催】

## 日本聖公会・熊谷聖パウロ教会の歴史 —教会運動と礼拝堂建築をめぐって—

熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹

### 熊谷聖公会・熊谷聖パウロ教会の創始

熊谷市の市街地に位置する日本聖公会・熊谷聖パウロ教会は、明治15年(1882)、東京でイギリス国教会の教えに共感を得た熊谷在住の人々の運動が発祥となっています。熊谷の伝道は、熊谷で馬車会社を営んでいた笛木角太郎氏が、のち上京して入信、聖書販売人となって熱心に福音伝道に努力し、熊谷を訪れ、路傍または知人宅で伝道説教を試みたことから始まりとされています。

明治18年(1885)には、この運動に応じて、日本人最初の聖公会聖職者である田井正一氏をはじめ、金井登氏、飯田栄次郎氏の説教会が開かれ、その翌年には金井登氏が当地へ派遣され「熊谷教会」を創設しました。その後、金井執事を中心とした伝道活動は着実に実を結び、1886(明治19)年5月に最初の洗礼式が、翌年には8回の洗礼式が、8月にはウィリアムズ主教による最初の堅信式が行われました。明治20年(1887)には日本聖公会組織を決議した第1総会が大阪にて行われ、金井執事はこれに出席するなど精力的に活動しました。

熊谷の信徒も増え、熊谷の石原の地での礼拝堂建設に向けた機運が高まりました。金井執事はその工事監督者を務めました。その頃から金井執事は肺病を患い、床に臥すことが多くなったと伝わります。明治21年(1888)1月28日、完成した礼拝堂の聖別式が盛大に行われ、聖公会熊谷教会と名付けられました。この式典に金井執事は体調不良により出席することは叶わずに、その直後の2月6日に逝去しました。明治27年(1894)に礼拝堂修繕工事がなされ、熊谷聖パウロ教会と名付けられた。

その後、大正4年(1915)には、現在地に新たな礼拝堂を造る計画が提案され、翌年にニューヨークのダナ建築事務所より派遣された設計家ウィリアム・ウィルソンによって設計が行われました。1919(大正8)年1月、現在の礼拝堂の建築が始まり、同年5月29日マキム主教司式による聖別式、アンデルス司祭司式による聖餐式が行われ、稲垣陽一郎司祭が説教者を担いました。

### 教会建築の概要

大正8年(1919)、着工から4年の歳月を経て煉瓦(れんが)造りの教会が完成しました。設計したウィルソンは、立教大学の礼拝堂や校舎、日本聖公会川越基督(キリスト)教会なども手掛けている建築家であり、煉瓦を組み合わせる建物構造の設計に多くの力量を注ぎました。その綿密な設計と併せて、日本で焼成された上質な煉瓦を使用していることから、関東大震災や西埼玉地震にも耐え抜き、また終戦直前の熊谷空襲による火災被害からも免れました。

建物は鐘楼を持つ平屋建ての構造です。鐘楼の1階部分が入り口ポーチとなり、礼拝堂にはベストリー(礼拝準備室)が付設されています。創建時の屋根は洋瓦でしたが、戦後に日本瓦に葺き替えられています。(建築面積141㎡、桁行約16m、梁行約7m)

外壁と内壁は煉瓦を積み重ね、それを支える木造の小屋組みや窓枠からは温かみを感じられ、祈りの場としての静寂さをたたずませています。煉瓦の長手方向に二枚分ある壁は落ち着いて重く、ゴシック様式の特徴の一つである「ポンテッドアーチ」と呼ばれる窓枠などの開口部は彫りが深く、突き出し窓には菱形の材が用いられ、内側から見た三連窓に良い効果を与えています。

内部南側には祭壇があり、上部には「シザーストラス」、「ハンマービーム」と呼ばれる木造トラスの小屋組は意匠的にも美しく感じられます。大きくアーチを形作る礼拝堂の入り口ポーチと礼拝堂入口の煉瓦造りの門が向き合っています。ポーチ部分の正方形のベルタワーには十字架が置かれ、英国国教会の様式の一つと考えられます。平成17年(2005)に国登録有形文化財となった熊谷聖パウロ教会の礼拝堂及び門は、熊谷地域のモダン建物の代表例に挙げられます。



## 熊谷出身日本初公認女性医師の荻野吟子と熊谷聖公会熊谷聖パウロ教会

### 荻野吟子の生涯

荻野吟子は、嘉永4年(1851)、現在の妻沼町大字俵瀬に生まれました。幼児より聡明で、儒学者の寺門静軒が開設した両宜塾で学び、松本万年に師事します。18歳で結婚しますが、不慮の病に侵され2年後に離婚。この治療の際の屈辱的な体験により女医の必要性を痛感し、医師となることを決意します。当時、女性には医師の道は閉ざされていましたが、数々の困難を克服し、明治18年医術開業試験に合格、日本公許登録女医第1号となり、35歳で東京の本郷湯島で開業しました。後にキリスト教活動で知り合った志方之善と再婚。2人で理想郷建設を夢みて北海道に渡り瀬棚町で開業しましたが、夫の死去で東京へ戻り、医院を開業。63歳で永眠しました。その波乱に富んだ生涯が直木賞作家・渡辺淳一の小説「花埋み」、NHKテレビ「風雪」や舞台「命燃えて」で広く世に紹介され、その愛と不屈の根性を慕って、利根川の堤防下に建つ荻野吟子記念館と生誕の地を多くの人々が訪れています。令和元年(2019)には映画『一粒の麦—荻野吟子の生涯』が公開されます。



### 荻野吟子とキリスト教、日本聖公会熊谷聖パウロ教会のつながり

《キリスト教との出会いと北海道開拓》

明治17年、古市静子と京橋新富座のキリスト教大演説会を聴き、強い感銘を受ける。

明治19年、カトリック本郷教会で海老名弾正牧師から洗礼を受ける。

聖句「人その友の為に己の命をすつる之より大いなる愛はなし」

その後の人生に大きな影響を与えた。(女性運動、夫志方との出会い、渡道開拓など)

明治19年、東京婦人矯風会(後の日本基督教婦人矯風会)に参加、のち風俗部長となる。

特に廃娼運動に熱心 自身の経験や女紅場も経営した内藤満寿の影響

明治20年、大日本婦人衛生会設立。発起人13人のうちの1人→家庭内衛生知識の向上に努める。

明治23年10月、吟子ら婦人矯風会21名、「婦人の議会傍聴禁止に対する陳情書」提出

12月、衆議院は、女子の傍聴禁止を解く。

明治23年、25歳の青年志方之善(同志社の夏休み、秩父での伝道補佐)が吟子宅に寄宿。

明治23年11月25日、結婚。之善の故郷熊本県山鹿郡来民町で挙式。

結婚半年後の明治24年5月、之善は、理想郷を目指し、丸山要次郎と2人で北海道に渡る。

犬飼毅らの権利の一部200町歩を譲り受けることになる。一度帰京し、一族等を連れ再び渡道。

開墾地を「神ともこいます」の意からインマヌエル(長万部近く、今金町神丘)と命名、

また、熊谷聖公会天沼恒三郎(熊谷市田島出身)、弟の天沼喜蔵を中心とした信徒も、インマヌエルに入植。開拓は順調と思われたが、明治28年、開拓地以外の貸付地の返還を命ぜられる。

インマヌエルでは、之善ら組合協会派よりも、聖公会信徒が次第に増え、両団体は分離。

この頃、吟子は東京明治女学校の校医、生理・衛生の講師及び舎監となる。

明治29年頃、吟子はインマヌエルへ渡道。

同年、之善、マンガン鉱山の開発を試み、吟子、養女トミを連れクヌイへ。

分離後も組合協会派と聖公会信徒との交流は続き、吟子も参加。

明治30年、之善、瀬棚で呉服店開業。吟子は31年、瀬棚で「荻野医院」開業。吟

子は、瀬棚淑婦人会を結成し会長に、村長婦人など有力な婦人が集まる。瀬

棚日曜学校も開く。明治38年に之善は病により逝去。その後、吟子は数年間医

療を続け、東京へ戻る。



### 【主な参考文献】

日本聖公会北関東教区『日本聖公会北関東教区 わたしたちの教会 教区設立120年』2016

山下祐樹・金子兜太『熊谷ルネッサンス』オーケーデザイン 2017

山下祐樹「熊谷聖パウロ教会の建築概要資料」2018

白井暢明「今金・インマヌエル移住団体におけるキリスト教的開拓者精神」『基督教学』2004